19
179

020478-000-1

19-179

基督教と国家

小崎　弘道／著

M22

ABI-0288

19-179 W2 18895/22

基督教と國家

小崎弘道著

「思ひきや我敷島の、道ならで浮世の事を問るべしとは」とは、曾て昔後醍醐天皇の朝、和歌の達人二條中將爲明卿が謀反の嫌疑に捕はれ、將さに拷問に罹らんとする時、其心情を表白せし所なり、基督教は靈魂上の敎なり、其敎旨は平和的にして、其敎徒は常に從順を以て稱せらる、然るに思はざりき近頃に至て基督敎は破壞的なり、其敎旨は父を無し君を無するの敎なりとの惡評を下す者あるに至るとは、若し夫れ基督敎其物をして其心情を表白せしめば、如何なる歌を以てすべきか、吾人は其歌の爲明卿の歌に似寄るべきを信ず

るなり、

保守新論は基督教を目して破壞的の宗教となし、國家を紛亂するものは此教にありと論じたり、尊王奉佛大同團は基督教徒を以て不忠不義の逆賊となし皇室の爲め基督教を排擊せざる可からずと主張す、其他國粹保存旨義の如き、保守主義の反響たる明治會の如き何れも基督教と國家及び皇室は兩立すべからざるものと思惟し孜々其排擊を勉むるものゝ如し、近時反動の風潮盛なるとは云ひながら、保守復古主義勃興の時代とは云ひながら、今日に於て此の如き論を爲す者あるは、重ね〳〵も不思議なる現象と云はざるを得ず、勿論五六年前に當て神佛の黨類は一時耶蘇教國害論とか、破邪顯正とか唱へ、之と同樣の說を主張したることあ

りたれども、此は多く爲にする所ありて發せしものにて而かも其黨類は重に無識なる神官か僧侶の輩なりし、然るに今時の耶蘇教國害論者は此等の黨類に限らず、稍ゝ政治の思想ある人士の間にも少からさるは最も不思議なる現象と云はざる可からず、

第一　二種の國害論者

同ト耶蘇教の國害を云ふ者にも、其心事を問へば必らずしも一樣にあらざるを知らん、或は基督教の性質如何を知らず、其泰西諸國に及ぼしたる影響如何を詳かにせず蒙昧無學迷信の然らしむる所、眞實之が我國を害し、我皇室を危ふせんことを恐るゝ者もあらん、或は基督教の性質も略〻之を知り、之が國家に對し皇室に對し害を爲さゞるのみなら

ず、却て益を爲さんことを知ると雖も、或目的を達する手段の爲め、爲めにする所ありて國害論を唱ふる者もあらん、而して其手段の爲めにし、何ぞか爲めにする所ありて之を唱ふる者にも、或は一種の政論を主張する爲めに之を主張する者もあらん、或は自己の宗教を擴張する手段として之を主張する者もあらん、或は一己の便益の爲めにし、或は朋友親戚の爲にし、或は境遇の爲に之を主張する者もあらん、要するに此種々の國害論者は之を二種に大別するを得べし、曰く迷信的の國害論者、曰く政畧的の國害論者是なり、坦奄居士第百一號の六合雜誌に尊王愛國と題し、余が所謂政畧的の國害論を裏面より排擊せられたるに、其内に左の如き言を用ひられたり

政治の黨派にまれ宗教の團結にまれ餘り喋々しく物新しげに我か黨派こそは皇室を重んずれ我が團結こそは國を愛するなれと言發するはいよ〳〵訝かしきことの限りにして「言葉の花に實はなし」の諺を思ひいださるゝなり。日本の粟を食ふ民にして誰か此心なからん。然るに殊更に尊王愛國等の語を用ゐて自己の黨派團結に結びつけんとするは獅子の威を借る狐の如く斯る好文字を看板として國人の人氣を招きその仲間を盛んにせんとの卑しき心構より他は見るべきやうなし。若し然らずとせば余はその何の要ありて此等の語を譫びすしく持出すものなるか解しあたはぬなり。そも日本皇帝は三千八百有餘万日本人民の皇帝にして日本帝國は三千八百有

餘万日本人民の國土なるにあらずや。然るに自己の黨涙自己の團結のみの皇帝また國土の如くいひなして他はみな臣ならず民ならずと言んばかりの面狀を示すが如きは何たる狂妄ぞや。皇室に對し奉りては不敬の至り國民に對しては無禮の極みなり斯てなほ尊王とよび愛國と唱えるは己を欺き人を誣るの甚しき者ならずや。斯る類ひは一いつとして帝室に益をあたへず又國家に利あらず却て帝王の尊嚴に傷つけ國民の平和を破る媒介ところなるべけれ。其人は憎むべきにあらねども其所作は憎しとも憎じ惶しくも帝皇の御名を利用して己が意を遂る猾手段に用ゐんとは。余は此の如き尊王家愛國者の一人だに無かゝちんことを切に願ふなり

政略的の國害論者に向ては、吾人亦別に云ふ所なし只一日も早く彼等が其非を悟り、正道に復せんことをこそ望ましけれ、然れども迷信的の國害論者、即ち眞實基督教の傳播を以て我皇室と我國家とに害あるものと信ずる者或は政略的の狡猾手段に惑はされて斯る迷信に陷者に向ては、其迷雲を拂ふことを爲さゞる可からず、殊に古來世に迫害なるもの起るは多く此迷信に基くものなれば、吾人は愈々此迷霧を晴除し基督教の眞面目を顯はすの必要あるを知るなり、

第二　基督教迫害の來歴

基督教進歩の歴史に、まゝ其裡面に迫害の歴史伴ふことあるは、吾人の痛嘆に堪へざる所なり、人其行の惡しきに因りて光を愛せず却て暗を愛す」とは、是れ迫害の起る原因を示

せる言なり、基督教は最も透明なる光なり、此腐敗せる暗黒世界は此光を見て不愉快の思を爲すなり、彼の基督がユダヤ人に關し、弟子等に語て「我若し來りて語らざりしならば。彼等罪なからん、されど今其罪いひ逃るべきやうなし……我若し外の人のせざりしことを彼等の内に行はざりしならば。彼等罪なからん、されど我と我父とを既に見且之を惡めり」と言ひたるは、此迫害の起る原因を示したるなり而して古今東西同一轍に出るは、其迫害の辭柄は常に基督教は君に不忠を爲し且國を害するものなりとの一事にあり、不忠國害の言實に恐るべきなりユダヤ人基督をピラトの朝に訴ふるや曰く、「我等此人が民を惑はし税をカイザルに納むることを禁み自ら王なる基督と唱ふるを見たり」と

(路加傳二十三章二節)不思議なる事には保守新論にては此言を以て基督の言の如く言ひ傲し、基督教の破壞主義なる議論の論據となしたり)基督は明白に我國は此世の國に非ずと主張せるをも聞くまとをせず、ユダヤ人は基督はカイザルに謀反せる者なりとの口實を設けて彼を十字架に釘たり、使徒パウロ等往て道をマケド、ニヤに傳ふるや、同所の人々は彼等を捕へ上官の許に曳き來りて訴へけるは「此人々はユダヤ人にて我等の邑を亂し、ロマ人なる我等の受くべからず、行ふ可からざる所の習俗を傳ふる者なり」(使徒行傳十六章廿一節)と、上官其衣をはぎ命して之を杖しめたり、又同國のテサロニケに至りしに、同邑にヤソンと云へる人あり、喜で彼等を受入れたるに、同邑の群衆は大に之を憤り、

ヤソン其他の人を邑宰の前に曳來り大聲に言ひけるは「天下を亂す此者共此に迄來れり、ヤソンは之を迎へ入れたり、此人々は皆イエスと云ふ外の王ありと云ひて、カイザルの命に背く者なり」(使徒行傳十七章六、七節)是れ當時の人が使徒等を迫害したる辭柄なり何ぞ夫れ今日の國害論者の口調に似たるの甚しき、基督教羅馬帝國に傳はり、三百年の間凡そ十回の大迫害を受けたり、之れが爲め殉死したる者幾百万の多きを知らず、當時信徒は山に逃れ、野に露され、地下に穴を堀り辛かに其命を逃れたり、其辛苦殆んど今日より想像すべからず、而して羅馬政府が何の辭柄を以て此の如き迫害を施したるか實に基督教は皇帝に不忠にして國を害する者なりとの一言にてありたりき、何か故に其從順羊

の如く其品性天使の如き良民を虐遇したるか是れ全く此の教は君に不忠、國を害する教なりとの妄想を爲したれはなり、近年彼のマダカスガル島に基督教傳はるや、同國の政府は基督教を以て忠君愛國の主義に戻るものとなし、力を極めて其の信徒を窘迫したり、嗚呼不忠國害の言何そ夫れ恐るへき哉古來基督教を迫害する者皆な之を以て唯一の口實と爲したるが之か爲め國を亂し人命を損せしこと勝て數ふ可からす、此辭柄や實に恐るべきなり、實際迫害の事に從ふ者は大概迷信的の國害論者なり、然れども之をして迫害の害毒を流すことを得せしむるものは、政略的の國害論者外に在りて之を煽動教唆することあればなり、迷信的の國害論者の心事憫むべしと雖も政略的の國害論者の心

事亦惡むべきなり、

第三　基督教の國家及び國王に對する教旨

基督教は神人間の教なり、人類が罪惡の中より救はれ光明の世界に達するの梁津なり、故に其教旨たる人に對するより神に對するもの多く、見るべきの世界に對するよりも見るべからざるの世界に對するもの多しとす、人に對するの教、見るべきの世界に關するの教誨なきに非ず、然れども是れ皆神に對し見るべからざるの世界に對する教より生し來るものにて、宛も鬱蒼たる葉朶、艶麗なる美花、豐饒なる果實、地下に在る一個の幹根より生じ來ると一般なり、故に神を信じ基督を信じ其救を得る者は子子たらざるはなく、父父たらざるはなく、君君たらざるはなく、臣臣たらざるはなく、人間々の道德は云はずして行はるゝに至らん、且つ基督教の神を愛すべし、己の如く爾の隣を愛すべし、是れ基督教の綱領なり、己の如く人を愛する教にてあらば、國を愛するは勿論、國君に對し、忠節を盡すことあるを固より其教の主旨なりとす、

然れども聖書中に國家若くは國王に對する教へなきに非ず、彼の福音書にパリサイの人とヘロデの黨がイエスを言ひ誤らしめんとて一の問を起して言けるは、「貢をカイザルに納むるは善きや惡きや爾如何思ふか我儕に告よ」時にイエスは貢の銀錢デナリ一を携へ來らしめて之に曰ひけるは、此像と號は誰か、彼等之に答へてカイザルなりと曰ひけ

れたイエス之に答へて曰く「カイザルの物はカイザルに歸し神の物は神に歸すべし」と、蓋し政と教とは相混ずべからず、教の故を以て政治上の義務を怠る可らず、又政治の故を以て教の義務を怠る可からざるの意なり、實に千古の卓見と云ふ可し、當時ユダヤ人とロマ人とに論なく、皆政教を以て一途となし一方にては救世の業は政治上の權威に依らざれば成就し難きとなし、基督を以て王と爲さんと計る者あれば、他の方に於ては基督教の教旨を以てカイザルの權威に反する者と誤解し、人々基督の深意を誤り居たれば、右の言を以て之が別あるを明かにしたるなり、政教別途の教旨は歐米諸國にても漸く近世に至て之を認めたる次第にて、此理明らかならざりし故、歐米諸國之が爲め害毒を蒙り

たる事少からず、現今我國にても政教別途の教旨は政事家中之を認むる者少からざれども、其間猶迷信を懷く者多しとす、殊に基督教を以て國家の壞裂を來たし、皇室を危殆ならしむるとの說を懷く者あるが如き、ユダヤのパリサイ宗、ヘロデ黨と優劣を判し難きものと云はざる可からず

基督は政教を二途に分てり、然れども政府に對し國王に對する教旨全く聖經中に見ざるに非ず、羅馬書十三章に「上に在りて權を掌る者に凡て人々服ふべし、蓋神より出ざる權なく凡そ有る所の權は神の立てたまふ所なればなり」云々以下同章の八節に至る迄は君に對し政府に對するの義務を敎へたる所なり、彼得書の第二章十三節「爾等主の爲に凡の人の立る所のものに服へ、或は上に在る王、或は惡を行ふ

者を罰し善を行ふ者を賞むる爲に遣はされたる方伯に服ふべし」云々以下十七節の「凡の人を敬ひ兄弟を愛し神を畏れ王を尊ふべし」と云ふに至る迄皆王に對し政府に對する の義務を敎へたる所なり、此外君臣主僕の關係を敎へたる所少からされども玆に贅せざるべし、要するに基督敎の敎旨は政府に對し國王に對し從順なるに在りとす、斯かる敎を以て破壞主義とか王を尊ばざるの敎とか喋々するは誹謗も亦甚しきと云はざる可からず

基督敎は從順の敎なり、然れども其從順たる或宗敎にて唱ふる如く、王法是正法と、國君の命を以て悉く神命となし、其是非曲直を問はず、之に默從する者に非ず、國君の命たりとも時に由りては從ふ可からざる事あり、政府の法令たりとも事に由りては反對せざる可からざる事あり、人類の不完全なる間は、此の如きは免る可からざる事と云ふ可し、故に彼の弟子等の如き其政府に對する行爲を見るに、常に從順なるにも係らず、時に其命を奉せざる事あるを見る、或日集議所の役人等弟子等を捕へ、基督の敎を傳ふる事を禁じければ、ヨハネ、ペテロは其命を奉せずして曰けるは「神に聞くよりも愈りて爾曹に聞かば、神の前に於て義たらんか、爾曹自ら判めよ、我等見し所聞きし所のものは言はざるを得ざるなり」其後再びユダヤ人に捕はれ議員の前に引き出されて、其禁に背きたると責められければ、彼等之に答へて「人に從ふより神に從ふは爲すべきの事なり」と謂て更らに屈する色なかりき、夫れ吾人は一國の法律には何處迄も從ふ所

なかる可からず、然れども苟くも其法律にして吾人の信仰に立入り、良心の自由をも束縛せられんとするに當ては、吾人亦之に默從するの義務あるなし、彼の弟子等は良心の自由、奉敎の自由を主張したる者なり、奉敎の自由い凡の自由の根本にして、吾人は大に之を重ずる所なかる可からず、基督敎初て奉敎の自由の貴重なるを世に明かにせり、吾人は此賜を重ずる所なかる可からず、論者或は基督敎に此自由を重ぜる事あるを以て、國家に對するの義務を破るものと誤認する者なきに非ず、然れども是れ思はざるの甚しきに非ず、然れども是れ思はざるの甚しきに て人にして奉敎の自由、否凡の自由を放棄し、唯命之に從はざる可からざるの義務ありとせば、是れ人にして人に非るなり、實に誤解の最も甚しきものと云はざる可からず、

之を要するに基督敎は從順の敎なり、然れども默從の敎に非ず、又政敎の分を爲し、敎を奉ずるが故を以て國家に對するの義務を怠り、國家に奉するの故を以て神に對するの義務を怠る者に非ず、而して國體の如何、政治の如何は其敎の問ふ所に非ず、君主專擅國にまれ、君民同治國にまれ、共和政治國にまれ、到る所行はれ得るものにて、曾て其政體其國體と衝突したる事あるを聞かざるなり、

第四　基督敎と歷史

基督敎が如何なる政體にも適し、如何なる國民にも應じ、其國家を鞏固にし、其社會の秩序を保持するの力あるは、古今歐米の歷史に照らして疑ふ可からざるの事實なり、夫れ歐米諸國何れも基督敎を以て建國の基礎とせざるはなし、夫

れ之に對するの關係に於ては、國々各々異にして同一ならず、或は一の國教を立つるあり、或は宗教自由の主義を取るあり、或は二三の教會を等しく保護するあり、或は教會を以て政府の上に置くあり、彼の米國の如きは所謂宗教自由の國なり、然れども基督教を以て國家の基本と爲すに於ては更に他の基督教國と異なる事なし、博士シャーフ氏國家と教會の關係を論じて曰く「教會と國家の分離は國民と基督教の分離に非ず」氏又基督教が米國に及ぼす影響を論じて曰く「我等の教會を亡ぼし、我等の安息日學校を閉じ、安息日の制を廢せよ、我が共和國は空なる殼の如くなり、我が人民は偶像教野蠻の形狀に墮落すべし、基督教は我が社會の最も大なる勢力にして、我が制度の主柱なり」云々トクヴール

は米國の制度の最も鋭敏なる觀察者なり、彼れ其政教の關係に關し左の如き言を爲せり、曰く「世界中米國の如き一個人の精神に基督教の勢力の大なる所はあらざるべし、又米國に於るより之が社會に必要にして人世に適するの實證あらざるべし、何となれば基督教の影響は世界の最も開明にして最も自由なる國民に最も大なればなり、……米國に於て宗教は其政治に直接の關係を有するに非ず、然れども其國の制度に於て最も勢力あるものと爲さゞる可からず、何となれば假令ひ宗教が直接自由を好むの精神を起すことなきにもせよ、之が自由制度の實施を便にすることあるは明かなる事實なり」米國にて異種の民族が集合し一の鞏固なる國民を造り成せるは基督教あるが故なり、基督教

決して破壞的の宗教に非ざるなり

米國に次て宗教の自由なるは英國なりとす、而して其宗教の盛なる又歐州中他に其類を見ざる所なり、英國は立君國なり、然れども基督教は其國の制度と撞着する事なきのみならず其制度の鞏固なるを致す一に基督教の勢力に基くと云はざる可からず、彼の英國に於て忠君愛國の精神を常に喚起し之を養成するものは、基督教會の感化なり、基督教又君を無するの教に非ざるなり、

獨國は宗教の隆盛或は英米二國に及ばざる可しと雖も、基督教を以て建國の基礎となすにい右二國と異なることなし、彼のビスマルクの如き、基督教を以て破壞主義と見做すことなきのみならず、之を以て國家盛隆の基礎となすは、數

年前或る宴會に於て演述せられたる演説を見て知るべし、

曰く

余の考を以てすれば、基督教國は決して今日に始まるものに非ず、彼の古代なる羅馬帝國、又歐洲列國と其齢を同ふするものにて右諸國の因て起る所を尋ぬれば、則ち此基督教に外ならず、凡そ國を建つるに宗教と以て基礎となすに非れば、其國の安寧を永遠に期するを得ず云々

是れビスマルク公一個の私言に非ず、同國全体の感情を代表するものと云ふ可し、彼の魯國の如き佛國の如き伊國の如き、基督教に少差なきに非ず、又國家と教會の關係に異同なきを得ずと雖も、基督教を以て國基となすに於ては他の諸國と異なる所なし、

近時歐米諸國に於て識者の最も憂ふる所は、虛無黨、社會黨等破壞主義無政黨の蔓延是なり、此の如き惡むべき黨派の起りたる原因は、教育の進歩貧富の懸隔即ち財産の不平均多きに居るべしと雖も、智德の不平均亦幾分か之か原因たらざるを得ず、傳道の書に曰く「夫れ智慧多ければ憤激多し、智識を增す者は憂を增す」と、歐米諸國近年基督教の進歩著きにも係らず、之を以て智識の進歩の速なるに比すれば、幾分か其後に蹤若たらざるを得ざるものあり、基督教が宗教改革後一時神學の議論宗派の軋轢多かりしが爲め、進て其恩澤を人民一般に及ぼすを得ざるか爲め、下等社會に於ては無宗教に陷る者少からざりし、是れ右諸國に於て破壞主義の無政黨蔓延を逞ふする一因と云ふ可きなり、破壞主

義の政黨起る基督教あるか故に非ず其感化不足する所あればなり

第五　基督教と國家

基督教が如何なる國体にも適し如何なる政治とも衝突することなく、却て其國家社會を維持したるは、歐米古今の歷史に於て明かなる所なるが、吾人は是より進て基督教が國家に對し、如何なる影響を及ぼすかと觀察すべし、

一、宗教道德は國家の元氣なり又生命なり、如何なる邦國にても、宗教の盛なる時い、其國元氣の興起し又其生命の盛なる時にて、宗教と國家は常に其興敗を與にするものと云ふべし、獨逸の詩人ゲイテー曰く「何れの世にても宗教心の盛なりし時は當世及び後世に對して光榮、高尙、利益ある世な

らざるはなし、之に反して何れの世にても不信説の勢力ある時は一時國家の繁榮と來すことあるも、永く之を保存する能はず忽ち消散し去るなり」と、米國第一の大統領ワシントンは其解職の演説に於て左の如き言を陳べたり、曰く

政治上の繁榮を來すべき凡ての慣習風俗の中、宗教と道德は欠くべからざるものなり、苟も人類幸福の柱石たる國民義務の基礎たる宗教道德に傷けんとする者に誰か愛國者の名を附するを得ん、若し夫れ宗教道德と人民公私の幸福の關係を縷述せんとならば一卷の書にても之と盡すを得ざる可し、試に問へ若し裁判所にて用ゆる宣誓式より宗教上の義務の觀念を取去ることあらば吾人は財産、名譽、生命に於ける安全を如何んすべき……或る

一種の人には教育の感化善く其人の道德を維持することを得べしと雖も國民一般の道德は宗教の主義に依らずして爭で維持することを得ん是れ道理と實驗に照して最も明かなることゝ云はざる可からず

ワシントンの言深く味はざる可からず、現今我國に於ては隨分宗教無くして道德を維持す可しとなし、又道德なくして國家を盛隆ならしむるを得ると思惟する者少からず、實に妄想の甚しきものと云はざる可からず、宗教道德は國家を鞏固にし政体を堅牢にするの基礎なり、泰西諸國其國家の堅牢なると致すは決して其憲法制度のみの然らしむる所に非ず、他に鞏固なる宗教上の基礎あればなり、殊に自由國に於ては宗教の必要最も明らかに見るを得べし、トクヴ

ール米國の制度を論じて曰く「國民の自由愈々大なるに隨て道德上の結合力益々鞏固なるに非れば爭で社會の壞滅を免るべき」又曰く「米國に於ては法律の禁じ能はざる所は宗教之を禁ド其國民をして甚しき無法の事を爲すに至らざらしむ」一國亦一個人と同しく其良心なかる可からず、宗教道德なきの國民い良心なきの國民なり、良心なきの國民爭で安全幸福を全ふするを得ん、而して一國の良心となり元氣となり生命となる可き教は、基督教を措て他に何をか求めん、是れ古來基督教國を除くの外眞に國民の体裁を成すものあらざる所以なり

二、基督教能く社會の不平心を醫し、能く人心の安寧を保持す國に、破壞主義の政黨起り、社會に紛亂を好む者あるい主

として人心の不平あるに因らずんばあらず、而して人心の不平を來すはとあるは、多く智識、富、權力の不平均なるに因る者にして、此等の不平均は人性に不同ある以上は決して醫す可からざるものにして、却て開明の進歩と與に此不平均を增す者なり、されば如何なる公平なる法律を制定するも、如何なる公正なる政を行ふも、此不平や到底醫す可からず、米國の如き世界にて最も自由なる國と稱する所も猶斯かる不平黨即ち無政黨ありて常に政府の壓制を唱へ年々社會の安寧を害することあるを免れず、只人心の不平を醫するの力あるものは基督教の一力なりとす、基督教は現世の外に他に一の無限無窮なる一世界を與ふるものなり、且つ人に至善至愛全智大能の上帝上に在りて人を保護誘導

ール米國の制度を論じて曰く「國民の自由愈々大なるに隨て道德上の結合力益々鞏固なるに非れば爭で社會の壞烈を免るべき」又曰く「米國に於ては法律の禁じ能はざる所は宗教之を禁ド其國民をして甚しき無法の事を爲すに至らざらしむ」一國亦一個人と同しく其良心なかる可からず、宗教道德なきの國民い良心なきの國民なり、良心なきの國民爭で安全幸福を全ふするを得ん、而して一國の良心となり元氣となり生命となる可き教は、基督教を措て他に何をか求めん、是れ古來基督教國を除くの外眞に國民の体裁を成すものあらざる所以なり

二、基督教能く社會の不平心を醫し、能く人心の安寧を保持す國に破壞主義の政黨起り、社會に紛亂を好む者あるい主

として人心の不平あるに因らずんばあらず、而して人心の不平を來すまとあるは、多く智識、富、權力の不平均なるに因る者にして、此等の不平均は人性に不同ある以上は決して醫す可からざるものにして、却て開明の進歩と與に此不平均を增す者なり、されば如何なる公平なる法律を制定するも、如何なる公正なる政を行ふも、此不平や到底醫す可からず、米國の如き世界にて最も自由なる國と稱する所も猶斯かる不平黨即ち無政黨ありて常に政府の壓制を唱へ年々社會の安寧を害することあるを免れず、只人心の不平を醫するの力あるものは基督教の一力なりとす、基督教は現世の外に他に一の無限無窮なる一世界を與ふるものなり、且つ人に至善至愛全智大能の上帝上に在りて人を保護誘導

することを教ゆれば、之を信ずる者に於ては其心常に爽快寛容如何なる困難如何なる辛苦をも喜で受けしむるの力ありとす、故に基督教の感化廣く一國に及ぶ時は必らず其社會に不平を懷く者なく國家安全を保つに至らんこと疑ふ可からず、歐米諸國未だ基督教の教化普からず、故に偶々非望を企つる者あるを免れず、然れども其破壞主義を唱ふる者にして未だ其志を遂ふすることを得ざるものは、一方に健全平和なる基督教徒ありて社會に望を爲すが故と云はざる可からず、

第六　基督教と我國の將來

基督教の歐米諸國の社會に影響を及ぼす所、以上論ずる如くならば我邦に於ける影響も亦此の如くならざる可からず、抑も我邦は目下變遷の最中にあるものにして國家の安危興敗は今日の方向如何にあれば其局に當る者は最も謹まざる可からざるの時なり、是迄我邦の風教を維持したる宗教道德風俗、泰西文明の進入と與に變化し去らざる可からず、而して此泰西文明の進入と與に人民一般、文明的の學問政治を採用するに至るは自然の勢にて人力の得て如何ともすべからざる所なり從來の宗教道德風俗は日々に其勢力を失ふに、之に代ふべきもの起らさるに於ては、我が人心は如何んすべき、我が國家は如何んすべき、人に智識のみを與へて道德宗教を與へずんば啻に道德の腐敗を來すのみならず、人心の不平は增々大ならさるを得ず、是れ吾人が將來に於て我が皇室に對し我が國家に對し憂慮措く能は

ざる所なり、世人は基督教の性質を知らず、之が國家皇室に對し如何なる影響を及ぼすものなるを悟らず漫に、之が傳播を以て憂ふ可き事の如く云ひ傲せども、吾人の憂ふる所之に異り吾人は單純の智識學問單純の政治思想即ち宗教と與にせざる所のものは將來我が邦に於て必らず憂ふ可きの結果を來すことあらんことを恐る、基督教徒は神を畏れ王を敬する者なり、されど彼れ單純の學者及び政治家は神を知らず又皇室を敬はとをせざる可し彼等得意の時には從順の良民たらん、然れども萬一其行路嶮難失意を生じ、不平の心を起す時には如何なる事を爲すに至るや知る可からず、論者は何を以て此欠乏を滿たさんとするか、何を以て其道德を維持せんとするか、何を以て其不平を醫せんと

するか、既てに死せる所の儒教は、如何なる神通の力あるも、活すことを得ざるべし、又泰西の文明と背致せる佛教は之を復興せんとするも開明の風潮に逆らふを如何せん加之佛教い古來世に、道德を與ふるの力ある教に非ず、又勤王の精神の皷舞したる跡をも見ざる教なり、たとひ此教の興隆あるも社會の道德國家の元氣には格別影響を及す能はざるを知る、此時に當り社會の風俗を維持し、世の不平心を醫し國家の基礎を固ふし皇室の安寧を保たしむべきものは基督教を除て他に何にかあらん、基督教は破壞主義に非るのみならず、國家の結合を固ふせしむるの教なり、又皇室の尊榮を保つ可きの教なり

近頃我ゞ友人に、來りて基督教の質義を爲す者ありたり、友

人は兼て其人が保守主義の政治を主張することを知り居りたるか故、其人の問ふ所必らず當時流行の基督教と國家に關する質問ならんと期し、謹で其人の問ふ所を聞きたるに、其人の質義は按の如く基督教の國家に及ぼす影響如何の問なりし故、友人は喋々基督教は啻に破壞主義に非るのみならず、社會を結合する大なる力ある事を例を引き證を取り論じたるに語未だ畢はらざるに其人聲を揚て曰く「是れ余が基督教の將來に於て最も憂ふる所なり、基督教は餘り結合力に富む者なる故、此教普く我か邦に傳いるに於ては或は人民の結合堅きに過き一個人の自由を輕ずるに至らん」と友人は其言の按外なるに驚き暫くは何の答をも爲すことを得ざりしと、人々の基督教に對する感覺は實に區

々のものにして、一方に基督教は破壞主義なりと唱ふる者あれば、又他の方には基督教は餘り結合力に富むを以て其弊害なりと攻擊する者あり、吾人は此の如き難問に向て何と答ふ可きか、只ギリストが當時のユダヤ人に告け給ふたる言の外之に適當なる言なきを知る曰く

我等の世を何に譬へんや童子街に坐し其侶を伴てわれら笛ふけども爾曹おどらず哀をすれども爾曹胸うたず

と云に似たり蓋ヨハチ來て食ふまと飲むとを爲ざれば鬼に憑れたる者なりと人々言へり人の子きたりて食ふことをし飲ことを爲れば又食を嗜み酒を好む人、稅吏、罪ある者の友なりといふ然ども智慧は智慧の子に義と爲らるゝ也

基督教と國家終

基督教及國家附錄

左の一篇は往年ルウテル紀念會のありしとき著者が演說したる筆記なり、所論の要旨今日に在りて益々必要なるを感ずいま附錄として之を載錄せり、

眞正なる宗教の必要

余輩宗教改革記を讀み、未だ嘗て宗教改革前の時勢の我國今日の時勢に甚だ彷彿たるを感せずんばあらず、(一)宗教改革前は、正さに歐州學問復興の時代なり、第十三四世紀に於て、ダンテー、ピッラルク、ボックケーショの如き諸學士起り、學問漸く盛んならんとするに當り、千四百三十九年に於て、伊太利、フロレンスに教會の大會ありたれば、希臘、伊太利の學士等東西より蝟集し、知識を交換し感情を相傳へたるを以て、學問の復興にます〳〵刺衝を與へ、殊に千四百五十三年に於て當時學問の中

心にして諸學士の群集せるコンスタンチノープル府は、土耳古人のために陷沒せられたれば、其學者四方に離散し、其學問を傳播し、以て當時の學問を愈々勸奬したり、加之活版術の發明は、實に千四百四十年にありて、學問の弘通をして益々便ならしめたれば、大に當時の人心に活動を來し、以て天下の學士をして羅馬教會の眞實なるを疑はしむるに至れり、此の學問の復興は、獨國に於ては格別不信說を起すの媒介とならざりしも、伊太利、佛蘭西に於ては、其傾向大に之に異り、羅馬教會の眞實なるに疑ひを容れ、凡べて宗教に信を失ひ、大に道義を輕んせしめたり、當時伊太利の一大學者なる、ピートル、ポンポネーショスは、ホローナ及びパアデユアに於て、公然靈魂の不死、天命の說は、唯だ哲學上の一疑問題にして、信を置くに足らざるを敎へたり、唯た學者のみ宗教に疑を抱きしにあらず、一般の人民及び宗教家も、尙ほ之を疑へり、當時不信說

の甚だ盛んなるは、ラトランの大會に於て靈魂の不死、未來の說等を確立するの必要なるを感じたるを以て知るべし、或る人の言によれば、當時の法王リオ第十世は、自ら上帝の存するあるを信せざりしと云ふ、宗教家にして斯の如し、一般人民の不信亦た想ふべきなり、宗教は唯だ愚民を支配するの具なるのみとは、當時學者の常談にして、最も謹嚴なる宗教道德の問題をも、一場の笑柄に付して反て得色をなせり、ギゾーが此時代を以て不信說の最も盛なりし佛蘭西革命前の時勢に比したる如き最も當を得たるものと謂ふ可し(二)宗教改革前に當り、風俗敗頽し人心の浮薄なりしは實に名狀すべからず、以太利の一監督曰く、「余れ若し淫事に係かる教會の誡律を嚴に行ふことをなさば教會中童子の外は一人も存するなからん」云々、當時の淫風なりし想ふべし、英國の學士ハラム當時の人心の浮薄なるを嘆じて曰く、誓辭は徒法たり、契約は初

より之を履行するの意なくして之を行ふ云々、此等風俗の敗頽を來したる原因は多くあるべしと雖も、其の重もなるものは赦罪券の公賣ならん、如何なる大罪にても、赦罪券にて購はれざるなく、罪惡の大小輕重各々定りたる價格ありしかば、人々罪を犯すことを輕んじ、人心の腐敗を來し、其弊勝げて云ふ可からず、しかのみならず、當時僧侶社會の不品行の惡しきは、筆紙に尽し得べきにあらず、僧侶の顯位を得るには、其の道德才學の如何を問ふことを爲さず、唯た苞苴の多寡如何を以てし、道德才學なきの俗人幼年、否な不德無學極れる惡漢數々僧侶の顯職を占めたるとあり、妻帶せずして清淨なりと稱する僧侶は、皆な隱かに妻妾を蓄へ、世を棄てたりと稱するの出家は、財寶に心を奪はれ、淨林と稱するの寺院は、惡鬼の巣窟となれり、嗚呼人を善道に誘ひ、之を罪より救はんとする僧侶にして、斯くまで腐敗するとは亦哀しきとならずや、當時の

形勢實に此の如くにありたれば、改革者起らざるを欲すと雖も豈に得可けんや

今之を以て我國今日の形勢事情に對照するに、余輩大なる感慨なきあたはず、我國が泰西諸國と交際を初めたるは、實に三十餘年の前にありて、泰西の新思想は忽ち我國に輸入し來り、歐米諸國の新機械新技術は俄かに邦人の嘆賞する所となり、我國人は一時に長夜の睡眠を破り、遽かに覺めて泰西の新思想を味ひ、泰西諸國と對峙せんとするに際し、人心活動の盛なる恐らくは我國味曾有の事ならん、我國學者社會なるものは、是までとても宗教心の乏しかりしに、偶々此新思想の輸入あるに際し、益々衝動せられて、彌從前の宗教に信を失ひ、今日に至て我國の上等社會は、幾ど無宗教の姿とはなりにけり、彼の福澤氏が、我國民は宗教の外に逍遙すと誇られたるも誣言とはなすべからざるなり、此無宗教

なる有樣は、宗教改革前よりは、寧ろ佛蘭西革命時代に彷彿たるものと謂ふべし、然れども我國下等社會の如きに至ては、宗教の念甚だ盛んなる形況ありと云はさるべからす、淺草の觀音或は琴平神社の如き、參拜の人々日々群を爲せり、されど此等は多く迷信より出るものにして、正しき宗教心より起るもの甚だ少しとす、今日我國の宗教熱心者と云へば、愚者にあらざれは大慾者ならざるもの幾ど稀れなり、種々の神々を崇敬するものを見るに、一身の息災延命を祈るか、若しくは立身金儲けを禱るの外他なきものなり、此等宗教者の多きは、無乃ろ憂ふべき事となさゞる可からず、且つ是等は學問の振起、知識の發達と共に早晩消散すべきものなれば、其盛衰とも識者の喜憂に關せざるものと云ふて可なり、我國今日の事情は如此、上等社會は已に從來の宗教に信を失ひ、下等社會は益々迷信に陷りたり、宗教衰敗の極度と云はざるを得んや

不信迷信の世は不品行の世なり、我國已に人心を修め得べき宗教なし何ぞ社會道德の善美なるを保し得ん、何ぞ人心の敦厚なるを維持し得ん、風俗益々頽敗し、人心彌々浮薄に流る、勢亦た已むを得ざるなり、第一男女間交際の汚穢なる實に公然云ふに堪へざるもの少からず、妓樓に遊ふものは、唯だ信を社會に失し、世人に齒せられざるものゝみにあらずして、縉紳貴顯の士亦た之を行ふ、妾を蓄へ淫を買ふもの其の最も羞つべきとなるを知らずして之を爲し、見る人復た之を怪しまざるなり、今下等社會の風俗如何は姑く之れを置き、今日我國上流に位する人にして、妾を蓄へざるもの幾人あるや、其正統なる妻を有するもの幾何あるや、其品行の正しきもの幾人あるや、之を明らかに示すの統計は得難かるべけれは、其詳細を知るに由なけれども、余輩は妾を蓄へざるもの正統なる妻を有するもの、品行の正しきものは、或は妾を蓄ふるもの、正

統なる妻を有せざるもの、品行の正しからざるものより少からんことを恐るゝなり、豈に悼むべきにあらずや、第二、目下我國に廣く行はるゝ文書の類を見るに、其の汚穢褻陋なる、父子の間に讀むを得可からざるもの多しとす、之が人心を腐敗せしむるの恐るべき、實に虎列刺病よりも甚し、虎列刺病よく人を殺すも、しかも其靈魂を殺すを得ず、猥褻なる文書は、其靈魂をも殺し又た其肉体をも殺すに至る、恐るべきに非らずや今や此の如き文書は都鄙至る處として見ざるはなし、見る人亦た之を怪しまざるなり、如何ぞ人心の清淨なるを保持し得んや、第三、從來の宗教家の不品行なる、宗教改革前の僧侶に勝ることあるも劣ることあらず、唯だ其異る所は、我國今日の僧侶は、宗教改革前の僧侶の權力の万分一をも有せざることなり、今日の僧侶の甚だ賤俗なる、其道德の卑陋なる、世人の普く知る所なれば、余は喋々之を辨するの勞を執らざるへし

唯だ余が此に一言せんと欲するものは、其誠實謹嚴なる心の乏しきの一事なり、余が今日まで觀察する所に由れば、僧侶が講壇に上り、說教をなすには兎も角、日常肝要なる宗教の道理を語るに、尋常世俗の談をなすに異ならず、其心に深く其の眞理なるを確知する色あるを見ざるなり、況や佛教講談會などに於て、好で猾稽がましき言を吐き、强て世人の喝采を得んと欲するに至ては、最も輕薄なる心情と現はすものと云はざる可からず、今日僧侶にして、其の奉する所の教を厚く信じ、聊か私念を懷くまとなく、誠實謹嚴以て之を主唱するもの幾人かある、蓋し之れなきにあらざらん、余未だ其の人を見ざるなり、佛教の末世とは云へ亦哀れなる有樣にあらずや、

我國今日の形勢已に斯の如し、必ず他日彼の歐州宗教改革の如き大變動なかるべからず、今日我國宗教の大變動の時機は已に熟せりと云ふ

べし、其徴効已に現はる、豈に慶賀せざるを得んや、ルウテル、ズウサンジル、は何れより起るや、イラスモス、は誰れなるや、ジョン、エッツ、は何くにあるや、之を見るの時遠きにあらざらん、今や已に斯かる時機に際會せり、豈に愉快ならずや、

偖、此の宗教の大變動なるものは、我國從來の宗教の改革なる乎、將た新教の輸入なる乎、人々により其答議に小差なきを保せずと雖も、此が新教の輸入たるは識者を俟たずして明らかならん、之を其教の優劣眞僞理非より推論するは容易の事なれども、今姑く之を擱き、其宗教の大勢より見るも容易の事ならん、從來の宗教者は何を以て其宗教の腐敗を清るを得る乎、如何してか泰西の新思想と並立し之と競爭するを得る乎、目今の佛教と大に改良することあらんとせんか、其存し得べきものは何程ぞや、若し佛教をして哲學の如くならしめんか、佛教が今日僅に

有する勢力も忽ち消へ去りて、唯僅小なる人士の腦裏に籠城するに至らん、今日佛教が僅かに勢力を有するものは、人民の智識未だ開發せず、愚婦愚夫の尚ほ多くして之が迷信と混するあるを以てなり、此の迷信去り智識開發するに於ては、何に由てか其の勢力を保つを得ん、加之如何して僧侶の道德を清淨にし、社會の風俗を改良するを得るや、其力何くにあるや、論して此に至れば佛教の命運已に盡きたるを知らん、嗚乎我が從來の宗教者は、此點に於て如何なる所論あるや、余輩之と聽んと欲するなり、是に由て之を見るときは、我國今日の形狀は宗教改革前より、寧ろ基督の降誕時代羅馬帝國の時勢に似たりと云はざるべからず、基督降生前に方り、羅馬帝國宗教社會の形勢は、實に困難なる有樣にして、上等社會の人士は希臘の哲學を學び、之に其心を奪はれ、自國從來の宗教に全く信仰を失ひ、之を信するものは僅かに下等社會の愚民の

みなりし、當時の學者が宗教を論ずるを見るに、其宗教を蔑視するの狀實に我國今日の學者の口より出てたるかと疑はるゝもの少からず、シヽロが當時の大學者なりと賞贊したるヴァルロー曰く、「國に宗教の存するあるは、一般人民に對して止むを得ざれはなり、人民を治むるには必ず此の迷信なかる可からず」云々、又其自著の古代史には、宗教を分ちて三種となせり、曰く鬼神說的宗教、曰く物理的宗教、曰く國民的宗教、鬼神說的の宗教は、詩人の詩歌に詠ずるものにて、詩人の奉するものなり、物理的の宗教は、學者の奉するものなり、而して國民的の宗教即ち世俗の宗教は一般愚民の奉するものとして之を嘲弄せり、又た羅馬の哲人セニカ、宗教の禮式を論して曰く、「凡て此等の事を識者が守るは法律の命する所なればなり、何ぞ神の心を悅ばしむるの意あらん」基督の降生後二十三年に伊太利のヴオロナに生れたる有名の博物學者プライニ

ーは其博物學に宗教の事を論じて其愚なるを冷笑せり、唯た學者のみ宗教を信せざるにあらず、之を奉する僧侶も唯だ職業として之を營むのみにて、眞に之を信奉する者甚だ稀なりし、當時の學者ケート曰く、「僧侶等が途に相逢ふて失笑せずして過くるを得るは甚だ不思議なり」と、當時人心の輕薄なるを想見すべし、奇なる事には、何の國何の代に於ても、不信の世は迷信の最も盛んなる時代なり、當時羅馬の都には、諸國より色々の神々を輸入し來りて其祭壇市街に相望めり、魔術師、卜者は國中に徘徊して巨利を占めりと云ふ、宗教の形況斯の如くなれば、其風俗頽敗し、人心浮薄に流れざらまく欲すと雖も得可からざるなり、其道德の頽敗したる形狀は、一々茲に揭載し難しと雖も、其最も甚たしきものを擧れば、夫婦の間正しきもの甚だ稀にして、內に正妻あるも外に妾を蓄へ、聊か已れの意に適せざることあれば、容易に其妻を去り、妻妾を

變換する衣服を變換するよりも容易なりし、當時の道德家なるシヽロの如きも、三十年間共に居たる妻を故なく去り、更らに年若き美女を其妻に迎へたりと云ふ、又た男色の盛なりしは、上下共に甚だしく、政治家裁判官將官帝王皆な之を行へり、多くの羅馬人は、一人の美少年に向て、一千弗を拂ひたりと云ふ、又た人民奢侈に耽けるの甚しきは、一飯に百弗を費すは常の事にて、或る人は上等の料理人を雇ふに、年に五千弗を拂へりと云へり、其外言ふに忍ざること甚だ多しとす、此の道德の頽敗は、當時の宗教が、已でに人智の開發に後れ、復た人心を收拾する能はざりしに因れるものにして、是れが羅馬帝國の衰頽を來し、遂に之を滅亡せしむるの原因とはなりたり、

我國今日の形狀、甚だ之に似たり、我國從來の宗教は、已に其の効力を失ひ復た人心を收拾する能はず、已に信すべきの宗教なし、上等社會は益

々不信に陷り、下等社會は彌々迷信に流れ、不信、迷信、人心を蠱惑すれば、風俗彌々頽敗し、人心益々浮薄ならんとす、豈に憂ふべきの時にあらずや、今や政治、法律、教育、藝術等、外部の開化には尙ほ爲すべき事多しと雖も、已に改進の途に向ひたりと云はざる可からず、然れども、內部の開化未だ端緒に就かざるなり、舊を棄てたるも未だ新に就かざるなり、港を出でたるも未だ達すべきの地あるを知らざるなり、迷信舊弊の牢獄を破りたるも未た永く住すべき自家の居宅あるを知らざるなり、夫れ今日は甚だ困難なる時に非らずや、抑々我國民は何を以て其身を脩めんとする乎、學校は何を以て其學生を教誨せんとする乎、父兄は何を以て其子弟を教訓せんとする乎、我が政府は何を以て國家の秩序を立てんとする乎、有志者は何を以て吾が風俗を改良せんとする乎、政治家は何を以て政治の腐敗を止めんとする乎、志士は何を以て我國の元氣を振

作せんとする乎、我國の志士たるもの深く思はさる可からず、今夫れ我國の有樣は、身体手足ありて頭首具はらさるが如く、人心にして良心なきが如し、嗚乎此の欠乏と空虛は何を以て補ひ塡たさんとするか、且社會は活物なり、人生の活動姑くも止む可からず、人智は益々開發せんとす、人智益々開發せば人心彌々險阻とならん、世人は何を以て此の險阻なる人心を矯正せんとするか、

論者或は曰はん、儒者こそ此空乏を補ふものなれ、我國の風俗を今日まで維持し來たるものは此儒教なり、孝悌忠信の道を重せしめたるもの此の儒教に外ならず、此儒教を措て何物か能く此空乏を補ふものゝあらんや、是れ時勢を知らざるものゝ言のみ、何ぞ共に語るに足らん、是まで儒教が我國に於て聊か益を爲したるは余も承認す可けれども、今日となりては儒教復た何をか爲すを得ん、夫れ儒教は支那周の世、封建時代

に起り、宋の世に至りて大に其体を爲したる、一種實利主義の哲學とも云ふ可きものなり、其精神は徹頭徹尾古を尙び今を賤しみ君を尊ひ民を輕ずるに在れば、今日改進の世界に行はるべきものにあらず、且つ其道德も外飾に走るの弊あれば、強て今日に行はんとするときに於ては、人民をして益々道德を輕んじ、彌々浮薄に走らしむるならん、豈に深く思はさる可けんや、且や儒教には元來活動力なきものなれば、假令幾分か社會に勢力を占むるあるも、人心を化導するの力なきは、古へ希臘の儒學が羅馬の風俗を維持する能はさりしと一般なるならん、豈に之を以て今日の人心を維持するを得んや

今一歩を退き、儒教の教育は文明の社會に適當し、其教理は完全なる脩身の理に適するとするも、他に一大難事あるを如何にせん、(一)抑々道德の行はるゝに必要なるものは權力なり、國に如何なる整備したる法律

あるも、之を實施するの政府無くんば復た何の益かある、道德の法亦た之に異ならず、其脩身の理如何に整備したりと雖も、心に道德の法を司るの上帝儼然上に在ますことを信するに非ずんば、何に由てか其獨りを愼むを得んや、支那古來の制にては、政教一致にして、政府道德の法を實施せしむるの責任をも負ひたれども、其の之を實施し能はざるは勿論、之を實施せんとするに於ては其弊の多き、無乃ろ全く之を放任するに若かされば、今や文明の諸國に於ては、政府は之を放任して、宗教獨り之を司るに至れり、政教一致の制度復た我國に行ふ可からず、我國人は何を以て此の空乏を充さんとする乎、道德を實行せしむるには必ず在さゝる所なく見ざる所なきの上帝を教示するの宗教なきと得さるなり、(二)道德の教は或は其行を正し得ん、何と以てか善を好み眞理を喜ひ、感激道に進むの心を起し得るや、人の罪惡をなす必すしも正邪善惡の

別を知らざるがためにあらざるなり、唯だ善を好むの心なきを如何にせん、天下何ものか能く人に善を好むの心を起さしめ之に善を爲すの力を給與するや、必ず之を爲すものなかる可からざるなり、嗚呼世人は何に由て此心此力を得んとする乎、

方今我國元氣の振作せざる可からざるを云ふもの少からず、元氣は國家の精神なり、生命なり、元氣にして消耗せは國家何を以て存するを得ん、國家の盛衰一に此に因ると云はざる可らず、今印度は幅員一百三十万方里、人口凡そ三億万、其幅員人口凡そ英國の十倍なり、十倍の地十倍の人を以て、數千里外に在る一小國なる英國の支配を受け、之に待遇せらるゝ、大人の小兒に於けるよりも尙はなはしきは何ぞや、是豈に元氣消長の差異あるに因るに非らすや、夫れ元氣は高明正大の氣象を以て養成すべきなり、孟子浩然の氣を說て曰く、其爲氣也、至大至剛、以直養

而無レ害、則塞二于天地之間一、其爲レ氣也、配二義與レ道、無二是餒一也、是集義所レ生者、非二義襲而取レ之也、是れ此れを元氣を養成する所以と云ふなり、世人は何を以て此の高明正大の氣象を養はんとする乎、何を以て此の公義の心を涵養せんとする乎、必す國に此心此氣象を、皷舞するの教なかるべからず、シロムウエル戰ふ毎とに兵士と共に詩篇を歌ふて上帝に祈れり、故に其兵は盤石鐵壁當るべからざりし、普佛の戰爭に普國の兵ルウテルの作れる讃美歌を唱へて進軍せり、故に其勇氣天を覆へり、今ま我國の兵は、何を歌ひ誰れに祈りて戰んとする乎、

今ま他に凡べて此等の空乏を充し得るものありとするも、此に地上のものゝ決して充たし能はざる一大空乏あるを如何にせん、夫れ人類は宗教的の生物なり、宗教なくしては一日も生息すべきものに非らず、我が奉すべきものは誰れなるや、我が死後如何んとは、何人の心にも自然

に勃起すべき疑問たり、人間の心は地上の者を以て滿足すべきものにあらず、常に無限絶對のものを渇望するなり、今何の宗教を以て此心を滿足せしめ、此疑問に答ふるとあるか、倩々世上を見るに、緑寥孤獨にして困難に逢ひ病疾に罹り、其氣衰へ其心屈し其望絶へ、悒鬱爲す所を知らざるもの幾人かある、斯の如き人は何を以て其心を慰籍するを得る、何を以て其心を安息せしむるを得る、孜々汲々其身を修めんとして、日夜克己復禮に從事するとも、私慾益々增長し、邪念愈々縱横し、幾と其驅除に窮し失望落胆するもの幾人かある、如レ此の人何を以て其心を安するを得る、是まで罪惡に耽り、其心汚穢なりしも、一旦深く悔ふる所ありて、其心を改めんとするも、罪惡の念去る能はず、神罰の恐れ其心に蟠まりて離るゝ能はず、悒々鬱々樂む能はざるもの幾萬人かある、誰か此等の人々に罪の赦を宣傳するものある、此等の人々は何を以て其心を慰

めんとするか、病に罹りて死に瀕するか或は已に世に望を失ひたるものにして、死後の事を知んとするもの幾何かある、此の如き人何を以て死後の事を明にするを得る、嗚呼人孰れか窮せざるもの無らん、孰れか失望落胆せざるもの無からん、孰れか曾て罪悪の念を抱かざるもの無からん、孰れか死後の事、神明の理と聞を欲せざるもの無からん、此等の慰籍安心を欲し、罪の赦を望み、死後の事、神明の理を知んと欲するものは、此等の人々のみにあらざらん、心を虛ふして考へなば、天下の人皆なは然るを知らん、嗚呼世人は此の慰籍此の安心を與へ、此の如き事此の如き理を教ふるの宗教を何處に求めんとするか、

今夫れ國に此心を滿足せしめ、其理を明にする眞正の宗教なきときは、人心岐路に走り、他の方向に向つて其滿足を求めざると得ず、宗教心は猶ほ空氣の如し、一方に於て滿つる能はざれは、他方に於て滿たざるべ

からず、支那日本には、是まで眞正の宗教あらざりしなり、幸にして其人心活動せざりしを以て其徵効著るしからず、故に上等社會の人々の心は、名譽を博する便途、政治の一邊に傾向したり、古昔の羅馬には、人心を滿足せしむるの宗教あらざりしなり、故に其人心初は外征、後、宴樂に流れたり、其宴樂に耽の甚しき筆紙に尽すべきにあらず、其一例を擧れば、羅馬の市街大さ三四十万の人を容るべき大演劇場を築き猛獸の鬪爭、人の仕合をなさしめ、市人之を觀て樂とせり、シーザル帝は、一次に三百二十組の果合をなさしめたり、オーガスタスは一万人の奴隷をして劍戟を以て戰はしめたり、又たシーザル帝は、市中に大池を堀り之に舟を浮べ海軍の活戰爭をなさしめたり、

佛國革命時代に方りて、天主教のみありて新教なく、上等人士を滿足せしめざりし故に、彼の慘憺たる革命の悲劇を演するに至れり、佛國に未

た眞正の宗教盛ならず、其國に數々革命あるを免れず、人心を滿足すべき宗教なきの影響實に恐るべきなり、我國人心未た十分活動せず、是より愈々活動せんとす、世人何を以て此愈々活動せんとする人民の宗教心を滿足せしめんとする乎、從來の宗教復た人心を拾收する能はず、世人何を以て此の人心を拾收せんとするか」

以上余が我國に眞正なる宗教の必要なるを論する所也、余い玆に斷して云んとす、我國宗教大變動の時機已に熟し、其人心を滿足拾收すべき宗教なく、大空虛を生するに方り、此大空虛を充し、其人心を滿足拾收し得へき者は、唯た眞正なる宗教即ち基督教あるのみと、今や夜已に更け、東方將に白けんとす、基督教は已に我國の教となり、今將に大に進まんとす、此教が我が人心を支配するの日を見るは、蓋し遠にあらさらん、

附錄了

基督教新聞は基督教の主義精神を以て日本社會一切の顯象を評論記載する唯一の新聞にして其唱道する所は眞正の宗教。高潔なる道德。正義なる社會。清潔なる文學。善良なる教育。にて義と愛の空氣を日本社會に充塞せんとするは吾新聞の最も自任する所なり世上新聞の數頗る多しと雖も高潔富愛なる士君子の讀むべきもの獨り吾基督教新聞あるのみ

基督教新聞の定價

一部	二葉八頁	金三錢	郵稅共 金四錢
三ケ月	十三部	金三十七錢	金五十錢
半ケ年	二十六部	金七十二錢	金九十八錢
一ケ年	五十二部	金一圓卅八錢	金一圓九十錢

廣告料

自一行至十行	一回	金六錢
自十一行至三十行	二回以上	金五錢五厘
自三十一行以上	限回	金五錢
自一行至五行	一回	金五錢五厘
自六行至十五行	二回以上	金五錢
十六行以上	限回	金四錢五厘
自一行至五行	一回	金五錢
自六行至十五行	二回以上	金四錢五厘
十六行以上	限回	金四錢

（五號文字二十二字一行につき）

六合雜誌

定價	一冊	四十頁以上
半ケ年	六冊	金八錢
一ケ年	十二冊	金四拾三錢
廣告料	一回	金八拾錢
自一行至五行	一回	八錢
自六行至十五行	二回以上	七錢
十六行以上	限回	六錢
自一行至五行	二回以上	七錢
自六行至十五行	限回	六錢
十六行以上		五錢

府ノ內外ヲ論セス別ニ運送料ヲ要スルコナシ

六合雜誌は明治十三年以來發行し來り重も宗教上の眞理を說じ神學哲學上の問題に關し廣く東西諸大家の論說を英集する目的とすれども併せて政治、經濟、學術等凡り人生必要の問題を論議するものにして且又歐米諸國の學海に起れる思想の波瀾は東洋學者の深く注目すべき所なれば時々彼國有名なる新著の書籍を說明評論し最も俗類に基督教の進歩を引き議論深奧高尚にして主義公明正大なるは本社の大に欣喜する所なり目下既に第百三號に達す江湖諸君の御購讀あらんことを希望の至に不堪候

植村正久君著　奥野昌綱君序　本多庸一君序

○再版 眞理一班　全　上等製本 三十五錢　下等製本 三十錢　郵税十六錢

本書は植村正久君か多年勉學の上著述せられしものにして其議論の正確なる文章の秀逸なる我國の宗教書中稀れに見る所なり今其目次を左に掲くれは江湖の諸彦其書の一斑を知り玉へ

第一章宗教を總説す其一○第二章宗教を總説す其二○第三章宗教を講究するに必要なる精神を論す○第四章神の存在を論す其一○第五章神の存在を論す其二○第六章神と人との關係を論し併せて祈禱の理を説く○第七章人の靈性無究なるを論す○第八章耶蘇基督を論す○第九章宗教學術の關係を論す

○基督教文學第一集 基督教及佛教　定價金二拾錢　郵税十二錢

右は曾て本社發行六合雜誌へ掲載したる諸大家の論文中永く存すべきものにて基督教と佛教に關したるものを摘集して一書となしたるものなり、一卷を手にして基督教佛教の優劣眞僞を判すべく、又現今日本基督教文學の如何なるやを見るに足るべし、今般出版發賣す、請ふ江湖諸君續々御購讀あらんことを、卷中の目錄下の如し、第一佛道の基礎（高橋五郎）第二佛道及基督教（井深梶之助）第三阿彌陀之説（ゴルドン）第四再論佛道（高橋五郎）第五我國に於て神道佛道の後狀如何を論ず（平岩愃保）第六論佛教道德（高橋五郎）第七佛教頼むに足らず（ゴルドン）第八世界佛教者の統計（小崎弘道）第九佛教を學ばる〻人々に告ぐ（高橋五郎）第十一佛教哲學一班（高橋五郎）第十愛を論ずる諸説を比較して耶佛二教の相違を明かにす（高橋五郎）第十二亞細亞の光と世界の光（井深梶之助）第十三近時佛教論（植村正久）第十四耶佛優劣私考（高橋五郎）

○倫理の基　全一冊　定價金貳錢　郵税二錢

右は一小冊子なりと雖も、一夫數婦の人情に悖り自然に背く所以を痛論し一夫一婦の正理が社會全躰に行はれざれば、今日我邦に最も欠乏せる一家の幸福は得て望む可からざる所以等を切論しだる者なり

松村介石君著　勝伯題字　看雨道人序

○神的教育 立志之礎　定價三十五錢　郵税十二錢

激慨賢愚ノ分ル貴賤榮辱ノ差ヲ處皆青年ニ在リ。楊子ノ泣路、墨子ノ悲絲、今尚ホ同感ニ堪ヘザルナリ。看ヨ方今我邦社會ノ景狀ハ如何ゾヤ、才子的、苟偷的、營利的、利己的、瞞着的、隱險的、術數的、雷同的、卑近的、小成的弊風ニ傾クニ非ズヤ。可懼、可惜青年子弟ヲ誤ルモノ實ニ斯時ヨリ甚シキハナシ。著者頗ル此ニ慨スルアリ、故ニ歐米諸大家ガ其國青年精神的教育ノタメニ著ハシタル諸書十餘種ヲ鑑シ、之ヲ今日本邦青年ノ狀態ニ質シ。憤然筆ヲ操テ躍出シ大聲疾呼危險失敗ノ地ヲ警シメ、成功立名ノ訣ヲ説キ青年ヲシテ浮薄鄙劣ノ流俗ニ墮チズ、公明至誠ノ氣象ヲ養ヒ、精神的正確的卓犖高尚的ノ人物タラシメンコトヲ欲シテ止マズ、是レ敢テ此著アル所以ナリ、若夫レ其論述スル所ヲ知ラント欲セバ、書中、青年旅ノ首途、日本社會ト日本青年、現時日本青年ノ危險、獨立、決意、精神、膽力、進路ノ方向、德義ト得喪、負債ト獨立、客奴ト義俠、師友ノ感化、萬有ト書籍ノ感化等、其他目下日本青年ニ適切重要ナル數種ノ問題ニ就テ之ヲ觀ヨ、成敗ノ理、禍福ノ道、自ラ其間ニ炳然明證アラン

伊勢時雄君著

○神之顯現　定價上製金三十錢　並製二十五錢　郵税十二錢

基督教果して眞理なる乎、上帝果して存在する乎、基督は果して神子なる乎、之を知

らんと欲する者は來りて此書を見よ、之を疑ふ者は來りて此書を見よ、之を信せんと欲する者は來りて此書を見よ、此書は目今我邦基督教社會に於て說教者として、傳道者として、篤志能文の學者として、鋒々の名ある伊勢時雄君が其該博なる思想と誠實なる信仰とを以て全福の精神を發揮し神は天地萬有により、エスキリストにより、明かに人間に顯現せるまとを論究せられたるものにして引證縱橫、立意精深而して文字亦明快流麗誦す可きものあり、苟も之を一讀する時には基督教の根本たる一大疑問を解するに於て何かあらん　蓋し宇宙とキリストとは神の顯現せる一大明鋭にして此書說き得て殆んど餘蘊なし　今や基督教は信教自由の大憲に由りて駸々として全國を抱被せんとするの時に當り江湖諸君幸ひに一覽あれ

小崎弘道君著島田三郎君敘德富猪一郎君題

○再板 政教新論

定價廿五錢　附錄 基督教ヲ信スルノ理由　郵稅十二錢

第一章、（緒論）改革の時代……第二章、我國政教の思想……第三章、儒教の性質……第四章、儒教の利害（第一）……第五章、儒教の利害（第二）……第六章、儒教の必用（第一）……第七章、宗教道德の必要（第二）……第八章、宗教道德の必用（第一）……第九章、儒教と基督教……第十章、基督教と文明（第一）……第十一章、基督教と文明（第二）……第十二章、基督教と改良……第十三章、教會と政府……第十四章、一己人と社會（結論）……附錄基督教を信ずるの理由

小崎弘道君著

○信仰之理由

全　定價金十五錢　郵稅八錢

本書は左に列記の目次に隨ひ著者此教を信ずる理由を記述せるものにして、世の道を求むる者に於て少補なくんばあらず、江湖諸君請ふ續々御購讀あらんことを

第一章宗教總論第二章神の思想及其原因第三章神の存在第四章人類と神の存在第五章天啓及其必要第六章基督の神性第七章奇跡及其効用

小崎弘道君校閲池本吉治君抄譯

○會衆派 教會政治摘要

定價十五錢　郵稅十錢

一致組合兩教會の合同は日本基督教會の一大事件にして其影響する所や大なりと云ふ可し而して其決着の期は既てに眼前に逼れり此際豈に歐米諸洲諸教派の性質政治等を參考し深く講究する所なくして可ならんや、本書は宗教改革以來會衆教會（コングレゲーショナル）の歷史、其政治教理禮拜執務利益等を列記せるものにして會衆教會の性質政治を知るに於て少補なくんばあらず今般弊社に於て出版發賣す江湖諸君請ふ續々御注文あらんことを

牧師加藤覺君撰

○改革教法 マルチン、ルーテル傳

定價壹圓　郵稅二十六錢

この書は獨逸有名なる學者が編輯せし所の書冊を參看し之に自家の意見を加へて撰まれたるものにして其項目は之を分ち第一章教法改革の來由○第二章ルーテルの出生及び其教育○第三章ルーテル修道院に入る○第四章ルーテルウイテンボルグ大學に教官たり○第五章ルーテル公然法皇に抗す○第六章ルーテル筆硯に從事す○第七章ルーテルウオルムス彈劾の議院に出づ○第八章ルーテル籠城の士となる○第九章改革の諸事を準備す○第十章ルーテル永眠に就く○第十一章教法改革の完成○第十

19
5
179

二章教法改革を論す」とせられたり書中當時の事態を論して吾國の現情に比し創意卓見の著るしき者多くその名は傳記なれど實は一種の論文にして少しく事理に通したる者の誦讀するには至當の價値ある著述なりと謂ふ故に之を閲するに於ては啻にルーテルの言行を知悉するのみならず大に信仰を助け敬虔の德を養ひ有爲の精神を發動するの益あるもの……極美製

英國法學博士ジェームス、レッグ著
日本　櫻井恒太郎氏譯

○基督教及儒教　本分論

定價四錢　郵稅四錢

基督教及儒教何れか人の歸依すべきものなるか、若し兩教が人間の本分に就て教る所を對照比較せば其優劣自ら明かならん、本書は即ち此點に關する兩教の所說をば最も公平に精細に比較對照論究したるものにして加ふるに譯者流暢の筆を以てしたれば一讀して兩教の優劣瞭然たるものあり、今般出版發賣す江湖諸君幸ひに一讀あれ

東京々橋區加賀町
警醒社

大阪土佐堀三丁目三十八番屋敷
福音社

發賣所

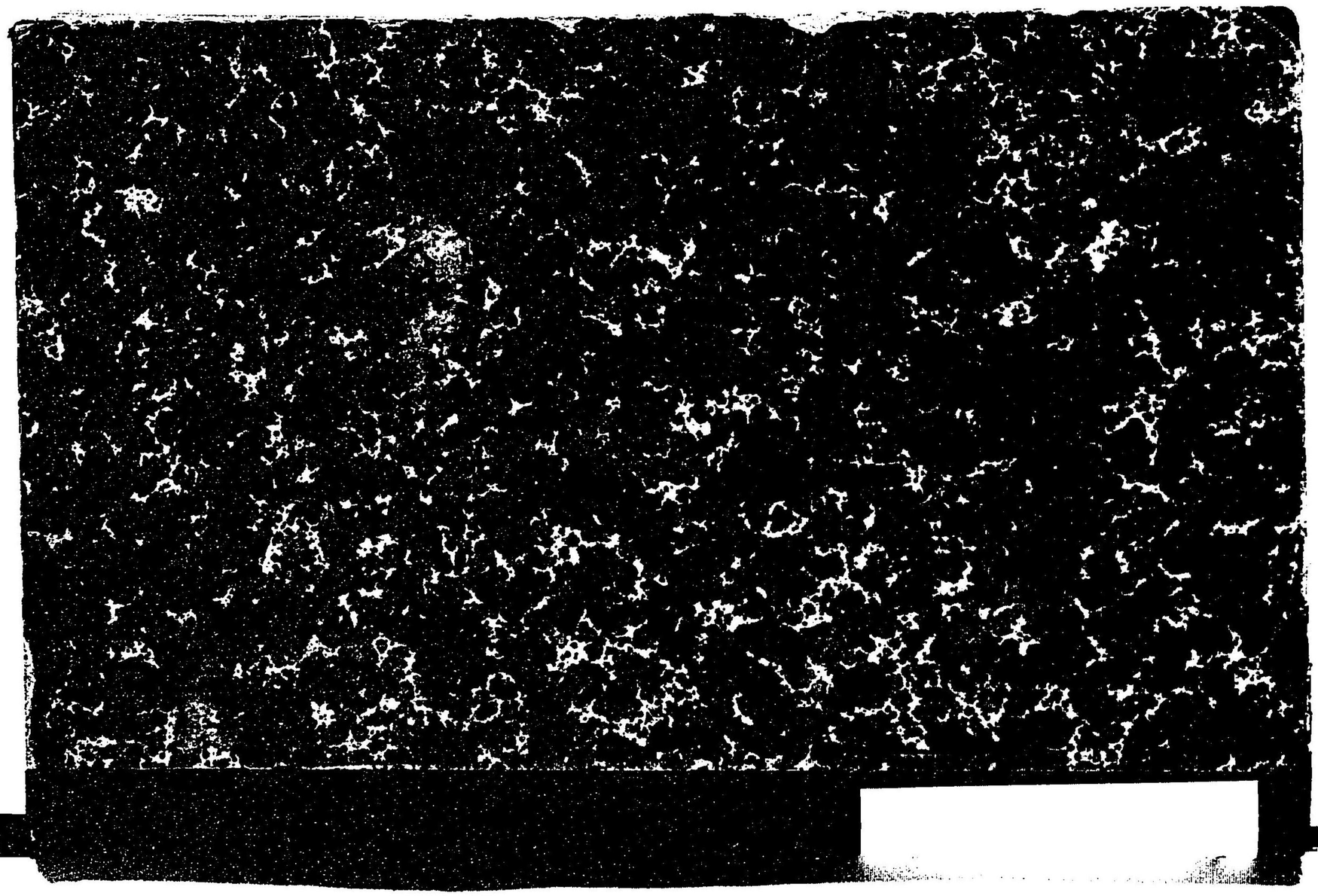
大賣捌所

明治二十二年七月卅一日印刷
仝　二十二年八月二日出版　（定價八錢）

保權登錄

著者　東京麹町區下二番町七十一番地　小崎弘道

發行者　東京京橋區加賀町十一番地　福永文之助

印刷者　東京京橋區瀧山町七番地藻鬧社　星野周作

發行所　東京京橋區加賀町十一番地　警醒社